京都市立芸術大学の創立130周年を記念し、同大にゆかりの作家の代表的名品を一堂に集めた展覧会「京都日本画の誕生～巨匠たちの挑戦」が京都市美術館で開かれている。同大の音楽学部出身で、子供のころから京都の日本画に親しんできたというマリンバ奏者の通崎睦美さんに聞いた。【澤木政輝】

in 京都市美術館　来月7日まで

土田麦僊「髪」
1911年、京都市立芸術大学芸術資料館蔵

通崎睦美さん

魅

ケースなし展示 名作の味わい

――通崎さんにとって、日本画は随分身近なもののようですね。

◆職人の家庭に育ったので、休みといっても旅行などはまれで、美術館とか画廊に行って、百貨店でお買い物をして、帰りに食事する、というのがたまの休日の過ごし方でした。画廊でどんな絵を見たかという記憶はあまりなく、ジュースをいただいてうれしかったことが思い出です。父も祇園で遊ぶようなダンナさんと違い、つましい生活の中でちょっとした美術品を手に入れて飾る、ということをささやかな贅沢としていたようです。美術館で見るような作品とはまた別ですが、身の丈にあったものだからこそ、自分のものとして楽しめるのでしょう。

――今日も床の間に、土田麦僊の軸が掛かっています。

◆これは私が買ったもので、「助六」の絵です。幾何学的な助六が気に入っています。描けそうで描けない、麦僊ならではの味のある絵ですね。アートバブルの若い作家さんの作品に比べると、意外に巨匠のちょっとした作品の方が手が届きやすいんですよ。着物も着るために買っていたらコレクションになったのですが、絵も美術品というより「ここに飾りたい」「この季節に飾りたい」という感覚で、日々の暮らしになじんでいます。思えば京都だからこそ出会えた物も多く、京都画壇と京都の町の結び付きの強さを感じますね。

――京都の日本画の、どんなところが魅力ですか。

◆子供のころに昭和中期の日本画を見ていて、「端正で奇麗なもの」というイメージが染みついていました。しかし、高校に進んで現代音楽をやり出したころから、日本画も「アート」としてとらえるようになると、何か物足りなくなる。一時は退屈に思え、洋画や現代美術を熱心に見た時期がありましたが、最近は大正期や戦前の日本画、奇麗なだけじゃない、ちょっとした面白みやしゃれっ気、そこにうまさが光る、自由な雰囲気の日本画にひかれています。（小野）竹喬のポップさなんかもいいですね。

床の間に掛けた土田麦僊「助六」を見る通崎さん

――今回の展覧会はどうでしたか。

◆京都画壇の作品をまとめて見ることができてうれしい企画ですね。有名な作品もガラスケースに入れずに並んでいるし。時代時代の斬新さが、いろんな角度から見られて、とても興味深かったです。村上華岳の「羆」なんか、美術工芸学校の卒業制作なのにすごく大人っぽいし、梶原緋佐子さんはもっとキレイ系なイメージでしたが、「古着市」にはすごみを感じます。中でも麦僊、若いころの「髪」にはひきつけられました。やわらかな印象なのに、ラインがシャープ。何かすごく色気がありますね。鏡台の強い色と淡い肌の色の対比も鮮やかだし、ポトリと落ちている櫛の位置も絶妙。若いころから完成されている、と感じさせられます。年代と作品を対比しながら見ていくと、作家の年齢や背景を想像しながら、その時代の京都の空気を感じられるのではないでしょうか。

つうざき・むつみ　1967年京都市生まれ。京都市立芸術大大学院音楽研究科修了。5歳

＜会　期＞　11月7日(日)まで　月曜休館　　団体料金　「京阪屋百華展～近代